

日本語の複数動作と副詞の体系

—動作のあり方に着目した類型化—

宮城 信

1. はじめに

本稿では「くり返し」や「何度も」等の副詞の整理を進め、これに対応する複数の動作(動き¹⁾)の表現の分析を試みる。本稿の探求課題は以下の2点である。

(1)

- a. 日本語の複数の動作の表現はどのようにカテゴリー化され、それを表す副詞との関係がどのように整理されるのか。(体系的整理：4.節)
- b. 単純反復の連続動作を表す副詞である「くり返し」と「何度も」のように類似する語の違いはどのように記述されるのか。(語義記述：5.節)

(1)aでは、副詞を列挙するだけでなく、副詞が表す事態の類型を整理することで我々の複数の動作のまとまりに対する認知過程(類型化の方略)を探ることを目的とする。また(1)bでは、Kuno(1970)が日本語の連続動作の表現を分析し、*repetition*(単純反復)と*succession*(入れ替え反復)との対立を指摘した。以来、「次々に」は*succession*を、「何度も」と「くり返し」は*repetition*を表す副詞として対置されてきた。本稿では類似した2語に何らかの意味の違いがあると考え。例えば、同じ*repetition*の両語が共起した次の(2)のような例は特異な表現ではない。

(2) 今や彼女がばつこの悪い思いをした映

像は、何度も 繰り返し 放映されてきた。(『苦悩の散歩道』)

そこで本稿では、他の語との関係から、2語の違いを見いだすことを試みる。(1)aはそれを志向した整理であり、複数の動作を事態の類型と副詞の双方から分析し関連づける試論である。

議論に入る前に分析対象の範囲を確認しておく。本稿では、動作の詳細を付加する連用修飾成分を広く考察の対象とする。以下便宜的にこれらの語句をおしなべて「副詞」と呼ぶことにする。したがって本稿での副詞の体系的整理の単位は品詞としての副詞に限定されず、代用表現も加えた連用修飾表現全体に及ぶ。また用例については『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』の書籍・雑誌・新聞(2001-2005年)からの出典であり、副詞は下線で示し(筆者註)、出典名は括弧で示した。出典名がない場合は作例である。

2. 複数動作の捉え方

2.1 事態のカテゴリー化

認知過程におけるカテゴリー化(categorization)は、「ある種の物体や経験のある属性を際立たせ、その他の属性を軽視したり、更には隠したりすることによって、その物体や経験を識別する自然な方法」(吉村1995, p.46)のように定

義・説明される。すなわち対象群に共通する性質を代表性とし、まとまりと認定する行為である。モノ（物体）のレベルでは、リンゴ、梨、桃等をカテゴリーとしての果物に配置する認知過程で多くの性質が捨象され、「木になる水気の多い果実」といった特性を有する同種のモノとみなされる。コト（事態）のレベルでも複数の動作をひとまとまりとして捉えることができる。次の(3) a,bでは、個々の動作を同種のコトの連続と見なし、まとまりとして捉えれば、(4) aのように言い換えることができるのに対して、(3) cは各動作が共通の述部を持つが、普通は(4) bのような言い換えはしない。

(3)

- a. まず太郎がプールに飛び込み、次に次郎がプールに飛び込み、さらに花子がプールに飛び込んだ。
- b. まず太郎が上手にプールに飛び込み、次に次郎が勢いよくプールに飛び込み、さらに花子がおそるおそるプールに飛び込んだ。
- c. まず太郎がプールに飛び込み、次に次郎が池に飛び込み、さらに花子が風呂に飛び込んだ。

(4)

- a. 太郎達が順にプールに飛び込んだ。
- b. #²⁾太郎達が順に何かに飛び込んだ。

以上の観察から、複数の動作に共通性を見だし、ひとまとまり（以下便宜的に複数の動作のまとまりを「複数動作」とする）と捉えるカテゴリー化では、個別の性質を制限なく捨象できるわけではなく、共通性を捉えるための一定の類似性が必要であることが分かる。

2.2 複数動作のカテゴリー化の多様性

連続動作に代表される複数動作をひとまとまりの事態とみなす日本語の表現にはどのような類型があるのだろうか。例えば、2.1節の(4) aは、動作の様態の違いを捨象し、動作主体³⁾を入れ替えながら継起的に実現される動作をひとまとまりと見なした表現で、このような例は、Kuno (1970) の *succession* の典型である。これらを以下「交換生起」と呼ぶ。また、個人を捨象して「子ども達」と一括りに捉えるならば、同種の動作が継的に繰り返される、次の(5)のような表現も可能である。これは、*repetition* の典型で、以下「連続生起」と呼ぶ。

(5) 子ども達が何度もプールに飛び込んだ。

さらに、次の(6) aのような複数の動作を重ね、まとめて1つのものと見なした(6) bのような動作のカテゴリー化を経た表現を、以下「一体生起」と呼ぶ。

(6)

- a. 太郎が1コースで、次郎が2コースで、花子が3コースでプールに飛び込んだ。
- b. 太郎達が一緒にプールに飛び込んだ。

類型の違いは、何を捨象して共通性を見いだすのかにあり、3類型いずれの場合も共通の認知過程を経ている。

2.3 考察の対象と先行研究

2.2節で見てきたように、ひとまとまりに捉えられた複数の動作の生起のあり方は主に副詞の生起によって表し分けられている⁴⁾。本稿における第一の目的は、(1) aで示した複数動作を修飾限定（詳述する）する副詞の体系の構築にある。

先行する副詞の研究には、日本語の連続動作の概説をした Kuno (1970)、それを受けて個別例を詳細に検討した、矢澤 (1986, 1987, 2000)、宮城 (2003, 2005) 等がある。しかしながら、いずれも語毎に修飾される事態がどのような意味的要件を持つのかを述べるに留まり、関連する副詞間の関係性は見えない。

3. 複数動作の表現の概観

3.1 複数動作の表現の範囲

本稿では、次の (7)~(9) のようなものを複数動作の表現と捉えている。

(7) 「シルクプロテイン配合」をうたった商品が、次々に登場している。(『産経新聞』)

(8) 明日の日曜日、府中へ行くのかどうかも 互いに 尋ねなかった。(『レディ・ジョーカー』)

(9) 伝玄墨汁の読経が続く中を乗組員たちが 順に 席を立てて焼香しはじめた。(『虚航船団』)

(7) は「「シルクプロテイン配合」をうたった商品」が連続して発売されたことを、(8) は二人の「尋ねない」という動作が対称的かつ一体的に⁵⁾ になされたことを、(9) は全員の「焼香」が規則的に続けられたことを表している。これらの例を踏まえて本稿では、「複数動作 (の表現)」を以下のように定義しておく。

(10) 様々な環境で生起する時間的前後関係を意識した、ひとまとまりとして捉えられる複数の動作 (の表現)。

複数動作に接近する表現に「並立の表現」がある。中俣 (2015) では並立の表現 (コトの並立⁶⁾) を以下のように定義する。

(11) 2つ以上のことなる事態の時間的前

後関係が解釈の際に問題にならない時、その事態は並立関係にある。
(p.10)

並立の表現も複数動作の表現も、複数の動作をひとまとまりに捉えている点では共通した認知過程を経ているが、前者は時間的前後関係に無関心な捉え方であり、これに対して本稿で扱う複数動作は、「時間的前後関係を意識した」ひとまとまりの動作と捉える点で対象の範囲が異なる。

3.2 複数動作を表す副詞

(10) の定義に従い、本稿で考察の対象とする副詞は以下の(12)の10語である。これらの副詞は、(7)~(9) のような複数動作の表現に生起可能で、それぞれの語固有の意味特徴を有する。

(12) 一緒に、同時に、互いに (お互いに)⁷⁾、次々に、順に、かわるがわる、交互に、交替で、何度も、くり返し

以下にそれぞれの副詞の実例をあげる。

(13) 大学 (立命館大学) に入って、いわゆる名門校出身の奴らといっしょに野球やるようになってみると、意外に大したことないなと (笑)。(『vice』)

(14) ロンドンで発信されたインターネットラジオの音楽番組を、世界中の若者が 同時に 聴き、感想をメールで発信している。(『経済界』)

(15) 父も母も私も懸命に働きながら、お互いに その日の楽しかったことを語り合い、それぞれの苦労を嘆いたり、~(『富の福音』)

(16) 弾くべき鍵盤が 次々に 光って、自然と運指 (指の運び方) が身につくのがミソ。(『YOMIURI PC』)

(17) フラッシャーとは、テールに並べら

れた複数のライトが順に点滅(フラッシング)することによって右左折時に方向を示す～(『バイシクルナビ』)

(18) 伯父さんと伯母さんがかわるがわる話すのを聞いています。(『「翻訳」してみたいあなたに』)

(19) ふたりの男女は、交互に台詞を受け持ちながら、けたたましく喋りはじめた。(『メイン・テーマ』)

(20) 同居人たちは、交替で買物に出かけたり、当番表を作って夕食の準備を～(『オーストラリア6000日』)

(21) レバションさんとは何度も話していますけど、年齢聞いてもいいですか。(『季刊オーディオベーシック』)

(22) トミーが野球のボールをくりかえし空中に投げては、三十センチもそれて空振りするのを見て、～(『願う力』で人生は変えられる。)

(12) の副詞は先行研究ではどのように説明されるのであろうか。例えば相互行為を表す副詞として分類される「互いに」と「交互に」を分析した宮城(2005)では、相互行為を「複数の個体からなる集合において、その中のそれぞれの個体が、主体と対象を、相互に受け持つような行為」(p.15)と定義し、その差異については「交互に」が「(時間的表現の) 順次的な入れ替えを表している」(pp.18-19) のに対して、「互いに」は順次性の含意がないとする。修飾関係の整理をする矢澤(2000)では「一緒に」「同時に」は「動きの同時性」(p.226) を表すとして区別しない。「何度も」と「くり返し」については、1. 節で取りあげた Kuno (1970) の分析がある。このように先行研究によって、いくつかの語の語義の分析は示されている

が、管見の限り、この類の副詞の共通の観点からの体系的な分析はない。この状況に鑑み、本稿では個々の副詞間の意味特徴の差異と関係を明らかにしていく。次節では、「生起様態」と「生起序列」という2つの観点を導入し、交差的に(12)の副詞の分類と体系化を試みる。

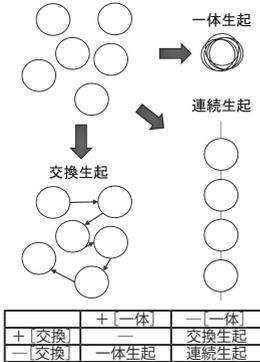
4. 複数動作のタイプと副詞の分類

4.1 事態の種類から見た副詞の分類

(10) で示したように、複数動作は「ひとまとまりとして捉えられる」ことで規定され、副詞によって修飾限定される。複数動作に2.2節で示したような捉え方の種類があるのだとしたら、それに対応させて(12)の副詞を分類していくことが体系の整理に有効である。第一の観点として複数動作の種類を見ていく。まず、「動作の様態の違いを捨象し、動作主体を入れ替えながら」(2.2節)、複数動作が継起的に生起していく「交換生起」がある。これに関わる副詞として「次々に」「順に」「かわるがわる」「交互に」「交替で」があげられる。この語群には、線条的な連なりを表す「次々に」「順に」と、異なるグループ間の入れ替えを表す「交互に」「かわるがわる」「交替で」がある。次に、「個人を捨象して「子ども達」と一括りに捉える」(2.2節)ことで、同一と見なした動作主体の動作が繰り返される「連続生起」がある。これに関わる副詞として「何度も」「くり返し」がある。そして「複数の動作を重ね、まとめて1つのものと見なした」(2.2節)ことで、複数の動作の共同作業が混然一体となったことを表す「一体生起」がある。一体生起の典型は複数動作が同時に生起する場合だが、動作の

前後関係を意識するからその同時の生起であり、(10)の定義とも矛盾しない。また、これに関わる副詞として「一緒に」「同時に」「互いに」がある。この語群の表す一体性には、「一緒に」であれば動作の場の重なり、「同時に」であれば生起する時間の重なり、「互いに」であれば動作の方向の指定の仕方の重なり(対称性)という違いがある。ここで事態の3類型について関係を整理しておく。類型間の関係性を捉えるため、重なりを表す±[一体]、入れ替えを表す±[交換]という2つの素性を導入する。この指標で、複数動作の認知過程を交差分類し、以下の[図1]のように整理する。

+ [交換] が- [一体] (動作の連続生起) を前提とするため、空欄にあたる複数動作は論理的に排除される。



[図1] 事態の類型の関係

4.2 生起の関係から見た副詞の分類

複数動作は(10)で示したように「時間的前後関係を意識した」ものでもある。これは、併存する動作間的前後関係が含意されることを示しており、それを表す(12)の副詞にもその含意が必須である。

前後関係の示し方には、発生順だけを直接的に示す「生起序列」と個々の様態の生起のあり方から間接的に前後関係に結びつける「生起様態」とがある。前者としては「同時に」「順に」「交互に」「何度も」が、後者としては「一緒に」「互いに」「次々に」「かわるがわる」「交替で」「くり返し」がある。どちらの系もある種の順序性に言及することになるが、生起序列系の副詞が動作の様態について言及せず、専ら順序性から前後関係に言及するのに対して、生起様態系の副詞は基本義としては様々な様態の生起のあり方を表しており、それと次の[図2]で左側に併置された生起序列系の副詞と対応させて順序性を読み込んでいると考えられる。これら2つの観点から交差的に整理すると、複数動作を表す副詞の関係は次のように整理される。

	生起序列	生起様態
一体生起	同時に	一緒に (お)互いに
交換生起	順に	次々に かわるがわる 交替で
連続生起	何ども	くり返し

[図2] (12)の副詞の関係

4.3 複数動作を表す副詞の共起テスト

本稿では(12)の語の表す意味の範囲の関係を捉えるために、当該副詞から任意の2語を選択して文を完成させるアンケート形式の共起テスト調査を実施した。調査概要は以下の通りである。

- ・調査時期：2017年6月初旬
- ・調査対象：国立大学教員養成系の1年生(理系文系混合)、130名
- ・調査方法：「次の例文の空欄に以下の語の中から2つ選んで自然な文を3つ作りなさい。」と指示し、以下の例文と

(12)の副詞を語群として与えた。

【例文】子ども達が〔前〕〔後〕友だちの名前を呼んだ。

調査の結果を整理して以下の[表1]を得た。「自然な文」であることを意識して、極端に頻度の低い例(0~2例)を除いた。

[表1] (12)の副詞の共起状況

前	後	正順数	逆順数	合計
同時に	一緒に	4	3	7
同時に	何度も	22	3	25
同時に	くり返し	6	0	6
交互に	互いに	0	6	6
交互に	かわるがわる	4	10	14
交互に	くり返し	8	4	12
交互に	何度も	6	8	14
順に	かわるがわる	6	3	9
順に	交替で	11	1	12
順に	何度も	4	3	7
順に	くり返し	4	1	5
何ども	一緒に	7	14	21
何ども	互いに	13	20	33
何ども	かわるがわる	3	10	13
何ども	次々に	0	7	7
何ども	交替で	3	4	7
何ども	くり返し	29	28	57
何ども	何ども	3	3	6
一緒に	くり返し	10	8	18
互いに	かわるがわる	1	7	8
互いに	交替で	7	4	11
互いに	くり返し	1	3	4
かわるがわる	次々に	4	3	7
かわるがわる	交替で	11	0	11
次々に	交替で	22	10	32
次々に	くり返し	4	0	4
交替で	くり返し	6	1	7

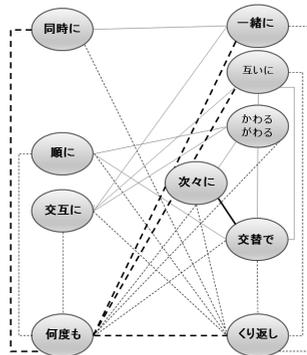
※網掛けは「生起序列」の副詞

正順は副詞の並びが表の順、逆順は逆

360

[表1]の組み合わせは、共起する副詞間で意味的な矛盾がないものと考えられる。「次々に-くり返し」のように一部重複があっても、ズレがあれば容認される場合もある(「何ども-何ども」については5.節を参照)。もちろん容認可能なすべての組み合わせが抽出されているわけではないが、延べ360組が収集され、容認性の高いものはほぼ抽出されたと考えられる。この結果を[図2]の関係図に重ねて示すと右段の[図3]のようになる(太線は20例以上の高頻度、破線は「何ども」「くり返し」との組み合わせ)。

[表1]、[図3]から(12)の副詞の共起制限についていくつかの傾向があることが分かる。まず、生起序列系の副詞から見ていこう。「何ども」は制限なくすべての副



[図3] (12)の副詞の共起傾向の関係

詞と共起可能である(「くり返し」もほぼ同様)。一方、同系の副詞「同時に」「順に」「交互に」同士は共起する例がない。これに対して、生起様態系の副詞は互いに共起可能な場合があるという違いが確認できる。特に交換生起の副詞「次々に」「かわるがわる」「交替で」の3語は相互に共起し合う組み合わせが一定数見られることや、類似した意味を表す「同時に」と「一緒に」や、「何ども」と「くり返し」の組み合わせが互いに相手の副詞との生起を制限しないことが確認できる。

5. 反復動作を表す副詞の語義記述

4.節での考察を受けて、実例での副詞の置き換え可能性を見ながら、その語義(基本義)の差異について考察していく。ここで言う置き換え可能とは、置き換えられる副詞と原文の表す事態とが矛盾せず、自然な文になることを意味する。これは、事態には複数の捉え方(側面)があり、置き換える副詞によって同じ事態の違う側面が取りあげられるということでもある。以下の例は括弧の直前が原文の語、括弧内が置き換える語とする。

まず、一体生起の副詞「同時に」「一緒に」「互いに」の置き換え可能性を見ていく。「同時に」は生起序列系の副詞で、その基本義は時間的前後関係の一致を表す。よって時間的な関係だけを表す次の(23)では、「一緒に」とは置き換えられない。また(24)では、置き換え可能ではあるが、表す事態が時間の一致ではなく、場面の一致に変化する。

(23) いまだに警戒する国粹主義者が軍の内部に存在する現実を示していたが、同時に(*一緒に)その文書的重要性を上層部が早くから認識していた証拠でもあった。(『週刊ポスト』)

(24) 有本恵子さんと同時に(#一緒に)行方を絶った2人の男性の計3人は帰国する話>が具体的な上に、解説もついていた。(『アエラ』)

(24)で「一緒に」が生起した例では、個別動作の併存ではなく、3人全員の関わりによって「行方を絶つ」という事態が招来されたと解釈されるので、「一緒に」が表す基本義は、動作の一体化と考えられる。これは基本的に共有された場面での生起であるため、時間的前後関係の一致を前提とする。このように様態の生起のあり方から間接的に時間的關係を読み込んでいくのが、生起様態系の副詞である。同様に生起様態系の副詞「互いに」は、動作の向きが対称的に指定されることを基本義とする。対称的な関わりは単独では成立せず、「一緒に」と同様に「全員の関わりによって」一体化がなされていると解釈される。動作の一体化が含意されていれば、次の(25)のように「一緒に」と置き換え可能な場合があるのに対して、動作の一体化がない「同時に」では

容認性が落ちる。逆に、時間的關係の一致とも一体化とも解釈できる(26)では、これらの副詞すべてが自由に置き換え可能となる。

(25) 兄弟は家の垣根の中でけんかをしていたでも、いざ外から侮りをしかけられると、互いに(一緒に/*同時に)手を取り合っこれを防ぐのが当然である。(『中国古典名言事典』)

(26) なお、指標データの提示方法については、郡内の学校が互いに(一緒に/*同時に)比較できるような形になっている。(『学校評価』)

次に、交換生起の副詞「順に」「交互に」「次々に」「かわるがわる」「交替で」の置き換え可能性を見ていく。「順に」と「交互に」は前後関係を直接指示する生起序列系の副詞であるので矛盾を生じ、多くの場合置き換えられない。一方、生起様態系の副詞3語は置き換えられる場合があるが、「次々に」が生起の累積(順に貯まっていくこと)を、「かわるがわる」が異なるグループ間での入れ替えを、「交替で」が1つのことを複数名で(入れ替わりながら)分担することを、基本義とするので、次の(27)のように累積に重点がある場合は、「かわるがわる」「交替で」との置き換えはできず、(28)のように交替に重点がある場合、累積を基本義とする「次々に」とは置き換えにくい。そして(29)のように複数での分担だけに重点がある場合も同様である。

(27) こうしたエピソードを、著者は次々に(*かわるがわる/*交替で)明らかにしていく。(『河北新報』)

(28) いうまでもなく毎日曜日に私の両親は教会に行ったが、礼拝は英語とドイツ語でかわるがわる(?!/*次々

に／交替で)行なわれていた。(『回想のオリエント』)

(29) 平日午後七時まで開館している図書館では、以後の時間も交替で(*次々に／*かわるがわる)残業する。

(『れんげ野原のまんなかで』)

次の(30)のように入れ替えだけに重点がある場合は、すべての副詞に置き換え可能になり、自然な文になる。

(30) 白衣に身を包んだ男女20人が手を伸ばすのは、皿に盛られたご飯。4種類を代わる代わる(次々に／交替)口に入れては、味や粘り、硬さ、香りを採点していく。(『朝日新聞』)

ここで生起序列系との置き換えも確認しておこう。様態の生起のあり方で、順序の解釈ができれば「順に」に近づき、交替の解釈ができれば「交互に」に近づくことになる。(27)は累積に重点があるので「順に」と置き換えることができ、(28)は累積より交替に重点があるので「交互に」と置き換えられやすい。また(31)では、表される前後関係の違いを無視すれば、すべての交換生起の副詞と置き換え可能となる。

(31) 4種類を(順に／交互に)口に入れては、味や粘り、硬さ、香りを採点していく。(= (30))

最後に、連続生起の副詞「何度も」「くり返し」について考察する。この2語の違いは見だしにくいので、先に置き換え可能性を見ていく。多くの場合、次の(32)のように「くり返し」を「何度も」に置き換え可能であるが、一方、(33)(34)のようにその逆は成立しづらい場合がある。

(32)「木」ではなく「森」を見るという視点を持つことが大切であると繰り返し(何度も)お話ししてきました。

(『まっ当なニッポン人は資産運用の王道を行く』)

(33) 昨年三月の地震ではクレーンが落下して多数の死傷者を出し工事が一時中断するなど、何度も(??くり返し)完成が危ぶまれた。(『西日本新聞』)

(34) 理想と現実とのギャップを埋められないせいで、悲しい選択に追い込まれがち。ただ、何度も(??くり返し)やり直しのきく遅しさが、あなたの特徴。(『an・an』)

(32)では「(複数回)同じことをお話しした」と解釈できるが、(33)では「完成が危ぶまれる」原因は類似性にはない。同様に(34)でもやり直しの多回性が「遅しさ」の根拠である。よって、生起序列系の副詞「何度も」の基本義は、厳密な順序性を持たない連続生起だけを表している。その意味で、Kuno (1970) のいう repetition 副詞の典型は「何度も」である。またその真偽に検討の余地があるが、飛田・浅野(1994)で「何度も」が「多数回を強調する様子を表す。」(p.424)と説明されているのも、専ら単純な反復を表す副詞であることに起因すると憶測される(飛田・浅野では「くり返し」の多数回は指摘しない)。一方、生起様態系の副詞「くり返し」は、「もう一度同じ言葉を繰り返した」のような述語用法からの拡張であることもあり、基本義は、同じこと(様態)を仕直すことである。仕直しから動作の連続関係を読み込むことで「何度も」と接近し、同じことの部分に着目しないのであれば、その差異はさらに曖昧になる。また単純な連続生起を表すこれらの副詞は、他の生起様態の副詞のあり方と衝突せず、連続生起を強調する用法において[図3]のように内省上はほぼすべての生起

様態系の副詞と共起可能である。さらに、(35) bのような入れ子型の修飾関係と解釈すれば、次の(35) aのような生起序列の副詞とさえ共起することができる。

(35)

a. ベンの隠れているトラックと、ダッフルバッグを持ったニックのいるエレベーターとを、何度も 交互に見返している。(『炎の記憶』)

b. [何度も [交互に 見返す]]

[図3] から明かなように、生起の様態を表さない「何度も」の方が、「くり返し」より多様な副詞とよく共起する。この両語が共起した(2)でも、(35) bのような入れ子型の修飾関係を想定することができる。また少数ながら[表1]で見られた「何度も-何度も」のような同一副詞が反復共起する場合は、入れ子型の修飾関係ではなく、強調された1語相当の表現⁸⁾と解釈する方がよいであろう。

6. おわりに—副詞語彙体系論に向けて

1. 節の(1)で示した本稿における探求課題に関する考察をまとめておく。

(36) 本稿のまとめ

a. 複数動作は、同類のものを見なしてまとめあげるカテゴリー化によって成立し、それを修飾限定する副詞もその意味に沿って体系をなしている。

b. [図2]の複数動作を表す副詞の関係図は、複数動作の捉え方と副詞間の類似性や置き換えの可能性を示している((1) aの体系的整理)。

c. 「何度も」と「くり返し」は同様に動作の連続生起を読み込めるが、基本義は異なり、異なる系に整理される((1) bの語義記述)。

d. 複数動作を表す副詞の共起制限は[図2]の関係図からも説明できる。

最後に、本稿のまとめとして、副詞語彙体系の試論を提案したい。この体系論は、副詞同士の関係からそれが表す事態の捉え方を体系化しようという試みである。すでに述べたように、ある事態を単文で表現しようとする場合、コトのカテゴリー化が必要である。表現の捉え方、すなわち認知の枠組みであるが、その広がりや直接的に画定することは困難である。それを受けて、本稿の考察では、まず複数動作の事態を修飾限定する機能を持つ副詞の整理を行った。そして副詞の体系に対応させて並行的に事態の類型化を進めることによって、どのようなカテゴリー化があるのかを抽出しようと試みたのである。それは、たとえ表現者が捉え方の違いを殊更意識しなかったとしても、自ずと表現の違いとして表出し、受け手はその違いに着目することによって帰納的に使用者の潜在する捉え方の意図を読み取ることができると考えたからである。日本語においては微妙な意味の差異を表す手段として、副詞が整備されていると考えるならば、逆に副詞の体系から表現の体系を推し量ることも可能となるであろう。もし、臨時的な一語も含めて、言い分ける語がないとしたら、それはアクシデンタルギャップではなく、捨象された違いということになる。

本稿で試みた複数動作を表す副詞の語彙体系の整理は、副詞間の関係と事態の類型との関係を説明すると共に、逆に表現の類型から生起可能な副詞を予測できる双方向的なモデルであり、3.2節で取りあげたような諸先行研究での個別の語

義記述では難しかった、表す意味の隣接性や語の置き換え可能性に関する説明も射程に収めた、より包括的な語彙関係モデルを志向したものである。

註

- 1) 本稿では、「公園の桜が次々に咲いた。」のような非情物の「動き」も考察の範囲とし、便宜的に「動作」と呼ぶ。
- 2) "# #"は容認可能な例であるが、この文脈の指す意味ではないことを示す。
- 3) 「それにはげまされて、彼は小説を次々に執筆した。」(『歴史・時代小説の作家たち』)のように対象が入れ替わることもあるが、本稿では動作主体で代表させることとする。交換に関わる以下の分析も同様。
- 4) 述部の形式の違いによって「飛び込みつづける」は連続生起を「酌みかわす」は交換生起を表すが、副詞と異なり、形式の整備が十分ではないため、詳細な差異を表し分けることはできない。
- 5) 「母たちは互いに娘の顔を見た」が、交差的な動作(母同士が向き合う)を表さないことから、「互いに」の本義は交差性より対称的な一体性にあると考えられる。
- 6) 中俣(2015)では、モノの並立とコトの並立を別に定義するが、複数動作と対照できるのはコトの並立である。
- 7) 現在のところ、「互いに」と「お互いに」の明確な差異は見いだせていない。BCCWJ(書籍、雑誌、新聞)の使用頻度は「互いに」(2273例)、「お互いに」(1492例)で前者が優勢である。
- 8) 「*順に-順に」や「*交替で-交替で」が容認されないことから、同一副詞の反復

で強調することができるのは基本的に多回性だけであると考えられる。

参考文献

- 中俣尚己(2015)『日本語並立表現の体系』ひつじ書房。
- 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版。
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版。
- 宮城信(2003)「連続動作の副詞的成分」『筑波日本語研究』8, pp.49-71, 筑波大学日本語学研究室。
- 宮城信(2005)「相互行為を表す副詞の構文と意味—「互いに」類と「相互に」類について—」『日本語と日本文学』41, pp.13-26, 筑波大学国語国文学会。
- 矢澤真人(1986)「反復動作の副詞的成分—「動詞句の意味特徴と反復表現の構文論的考察」試論—」『国語国文論集』15, pp.73-94, 学習院女子短期大学。
- 矢澤真人(1987)「頻度と連続—連用修飾成分の被修飾単位について—」『学習院女子短期大学紀要』25, pp.1-18, 学習院女子短期大学。
- 矢澤真人(2000)「副詞的修飾の諸相」仁田義雄他『日本語の文法1 文の骨格』岩波書店。
- 吉村公宏(1995)『認知意味論の方法——経験と動機の言語学』人文書院。
- Kuno, Susumu(1970)Feature-Changing Rules in Semantics *Mathematical Linguistics and Automatic Translation Report NSF 24*, pp.69-89, The Aiken Computation Laboratory, Harvard University, Cambridge, Massachusetts. (富山大学)